

2023年3月5日 礼拝説教要旨

詩編講解説教139「わたしを極める方」

詩編139：1～10、ヘブライ4：12～13

信仰とは人間の方から神さまの存在を認識することだと多くの人々は考えます。神さまの存在に気づき、生涯をかけて神さまを知る、追い求めていく。それが信仰生活であり、そういった人間の側からの方向性を意識するかもしれません。しかしわたしたちが神さまを知る前から、それをはるかに上回って神さまの方がわたしたちをご存知であられる。福音書に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ15：16)とあります。わたしが神さまを選ぶよりも先に神さまがわたしたちを選ばれている。常に神さまの側の働きが先行しているのです。そのような神さまの働きの中に取り込まれ、そこで初めて人間は神さまを知ることになる。「聖霊によらなければだれもイエスは主であるとは言えない」(Iコリント12：3)とあるように、わたしたちが神さまを知ることができるように、常に神さまの方が働きかけておられます。

「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」(1節) ここには神さまがすべてをご存知であられるという信仰があります。1～6節に出てきます「極める」「知る」「悟る」「通じる」はすべてそれに関連した言葉です。特に「知る」(ヤーダー)は単に知識として知っているということではなく、愛を持って関わる人格的な交わりを示す言葉です。例えば、同じ言葉が創世記の第4章1節「アダムは妻エバを知った」に出てきます。それは肉体的な関係をも含む人格的な関係を意味しています。神さまがわたしたちを知ると言った場合も、それは何より人格的なつながりを意味します。

わたしたちの感覚で言えば、単なる顔見知りではない。それこそ夫婦のような、深い絆で結ばれた関係と捉えてよいでしょう。昨日は結婚式がありました。教会は結婚を重んじますが、それは創世記のアダムとエバの物語が根拠になっています。「男は父母を離れて女と結ばれ二人は一体となる」(創世記2：24)この「一体性」こそ「知る」ということに他なりません。そしてこの一体性は単に肉体的なものだけではなく、心と心が通じ合うことでもあります。夫婦であれば、同じ思いを抱く。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマ12：15)とあるように共感できる関係がそこにあります。それまでは他人同士であります。結婚生活の中でそういう関係性が作られていきます。これは神秘としか言いようがありません。神さまはまさにそのようにわたしたち人間と関係を作られます。ユダヤ人の哲学者マルチン・ブーバーは信仰を「我と汝」という関係性でとらえたことは有名ですが、神さまはわたしたちを「あなたとわたし」の関係の中に置かれます。

結婚式の司式をしながら改めて教えられたことがあります。式文の中でエフェソの信徒への手紙を読みます。パウロはそこで先の創世記の御言葉「男は父母を離れて女と結ばれ二人は一体となる」を引用し、さらにこう言うのです。「わたしはキリストと教会について述べているのです」(5：32)と。大胆にも夫婦の関係をキリストと教会の関係になぞらえています。夫に対してはキリストが教会を愛し、教会のためにご自分をお与えになったように妻を愛しなさい。また妻に対しては教会がキリストに仕えるように妻は夫に仕えなさいと教えます。

どうしてそういう大胆なことが言えるのか。それはわたしたちが洗礼を受けてキリストと一体

になるからに他なりません。そこにはまさに夫婦のような一体性、関係性が生まれるのです。神さまがわたしたちを知っておられるというのは、監視カメラで厳しく監視しておられるということではありません。人格的な愛のまなざし、相手を思い、愛おしむまなざしで見えておられます。共に喜び、共に泣く。喜びも悲しみも痛みも共感する。そのようにすべてをご自分のものとして感じ取られるようにしてわたしたちを知ってください。それは救いではないでしょうか。安心ではないでしょうか。

やがてそのまなざしは具体的な形となって表されました。それがイエス・キリストです。「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにもいます」(7～8節)「天」とは神さまの国であり、「陰府」(シエオール)とは死者の世界です。ここには本来超えられない隔たりがあります。人間は罪を犯して死すべき存在になりました。陰府に身を横たえる者となった。しかし「陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」この御言葉はイエス・キリストによって成就しました。

教会は受難節の時を過ごしています。ペテロは主イエスを「知らない」と言いました。わたしたちは神さまを否定し、関係ないと言ってしまう。そういう罪深い者です。けれども神さまはそのようなわたしたちを見捨てずに、どこまでも関わりを持ってくださる。それは死の中、陰府の中にも及びます。十字架の上で主は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのか」と叫ばれました。改革者カルヴァンはあの十字架の上に陰府があると云います。それは神さまから見捨てられ、もはやその御手の届かない場所です。でもそこにキリストはおられる。そのためにキリストはあの十字架の苦しみを耐えてくださいました。そして御手を持ってわたしを捕らえ、そこから導き出してくださいました。

聖書の信仰は何より神さまと人間の間を関係を示します。神さまとの関係が「あなたとわたし」そういうつながりの中に置かれた者は、人間同士の関わりもまたそのように相手とつながり、相手を思いやることができるように導かれるでしょう。関係性が希薄になり、分断される時代だからこそ、信仰が希望になります。